四村俊子とわたし

丸岡秀子著

四村俊子とわたし

丸岡秀子 著

ドメス出版

まるおかひでこ
丸 岡 秀 子
長野県に生まれる　奈良女高師（現・奈良女子大学）卒
婦人問題，教育問題を研究
＜編著書＞『日本農村婦人問題』（高陽書院）『女の一生』（岩波書店）『母親入門』（国土社）『物価と家計簿』（岩波書店）『婦人教師との人生対話』（明治図書）『ある戦後精神』（一ツ橋書房）『ひとすじの道　一部・二部・三部』（偕成社）『婦人思想形成史ノート』（上）（ドメス（出版『日本婦人問題資料集成』（思潮・上巻）（ドメス出版）他多数
＜現住所＞東京都世田谷区船橋３－６－16

田村俊子とわたし

1977年７月１日　第１刷発行
著　者　丸岡秀子©
発行者　今田喬士
発行所　株式会社ドメス出版
東京都豊島区駒込１－35－２
振替 東京 8-48766
電話 03-944-5651
印刷所　あづま堂印刷株式会社

落丁・乱丁の場合はおとりかえします
製本／明光社

目次

第一章　紫衣のひと　5
第二章　二つの強さ　17
第三章　寂しい浪費家　46
第四章　暗い時代へ　66
第五章　婦人問題の深層　88
第六章　苦しい恋愛と執筆　121
第七章　日本を去る　177
あとがき　219

装帧·题字　粟津　潔

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

田村俊子とわたし

第一章　紫衣のひと

晩春の成城の町は、並木の芽吹きが明るい靄をただよわせていて、そのなかを歩いていると、吸う空気も緑色に匂っていた。広い道幅は、わたしの歩みをもゆったりさせ、通行人の少なさは、一軒一軒の門柱にも目を注がせた。表札に横書きのローマ字がはめこまれているのも、洋館の窓口が半開きになり、そこに模様入りのレースのカーテンが動いているのも見逃せない。自分の住む町との比較をしないではいられなかったからである。

並木道がトンネルのようにまっすぐに並び続いたその出口にさしかかると、そこにわらぶきの家を囲んだ大きな竹藪の繁みがあった。ここがこの町の市街部の切れ目にあたり、ここから農村部に入る。わたしにとっては、なじみ深い農村地帯への入口である。その竹藪のうす暗がりを過ぎると、急にまた明るいまぶしさに出逢う。そのまぶしさは、目路をひろげる田圃であり、その田圃は、小高い丘裾にまで続いている。畦道といってもいいほどの狭い道は、これまで歩いてきた並木道を幹にして、その枝のようにも思われる。両側に並ぶ稲田は、もう代かきもすみ、苗代の準備がはじまりかけていた。

わたしはその枝道を通り過ぎて、丘の上にある芸術家の集りにいそいでいた。足はたしかにいそいでいたが、心はその逆にすこしもはずまなく、その芸術家をとりまく人びとの多彩な群をま

ばゆく想像するだけだった。

この日は、陶芸家・富本憲吉の窯開けの日だった。富本が成城に移って窯を築いてもう何年になるだろう、というわたしの回想は、法隆寺の近くに在った小さなあの安堵村と結びつく。竹藪や、梨畠の多かった安堵村の、広い田圃のなかにポツンと建っていたたった三部屋の簡素な家に、青春を燃やして華麗だった富本夫妻を訪れたわたしの十代後半のあの頃と、成城という、しゃれた町を独りで歩いている二十歳代後半のこの今。

けわしい山の頂上をはいずり歩いてきたようなこれまでを、漸くここまでたどりついた、そのような疲労感は体のどこかに残っている。わたしの回想は、夫妻とのおたがいの人生経験にまでひろがり、あの奈良の安堵村での窯あけと、この成城での窯あけとが、ちゃんとつながっていて、こうしてわたしを歩かせている。それはまったく不思議な足どりに思えた。

昭和十一年の晩春が過ぎて、いちばん好きな初夏が始まるさかい目ともいえるある日、憲吉夫人、一枝の手紙が、他の郵便物のなかにまじって、目立っていた。巻紙の草書の手紙で、その一字一字に彼女の才気があふれ、響きの高い声と、窯のなかから取り出される憲吉の作品の艶やかさを想わせるような表現だった。

この招待は、安堵村での招待の続きであったが、その続きのなかに置かれたわたしの環境には、就職、結婚、出産、夫の死、再就職など、多様な変化がふくまれていた。しかも、再就職の仕事の中身は、それ以前の仕事の中身、教壇に立つという仕事とは、まったくちがい、こんどは、底辺の農村地帯をはいずり歩くような地味な、目立たない仕事であった。そのことについて一枝は特別な関心を持ったらしい。それは彼女にとっては、未知の世界であったからで、好奇心の旺盛

な彼女としては当然のことであろうと、わたしは思っていた。
たびたびの手紙にも、そのことに触れることが多く、ゆっくり時間をとって未知の世界にあるものを知りたいと書いていたが、わたしは彼女の関心に答える興味もなく過ごしてきた。答えてみても、彼女の生活との隔たりは、その理解の限界を明瞭にしてしまうと思いこんでいたからである。
そのわたしの職場生活も、もう十年近くなっていた。その間の起伏は、起伏の波間をくぐりぬけるだけでも、からだが消耗した。からだのバランスの狂いに、動悸のはげしい不安な夜を明かしたり、不眠のために足取りの重い通勤を続けなければならないような傾斜の時期もあった。
その休息をとらせたいという意味もあってか、と思わせるほど、憲吉の窯開けの日には必ず招いてねぎらおうとする一枝の心づかいを、これまでもわたしは素直に受けてきた。
この日の手紙も、その前半までは、いつものことと読み進んだが、後半のところで、
「どうしてもこの日、あなたに紹介したい人があるので、ぜひ都合をつけて来てほしい」
とある箇所で、わたしは立ちどまった。
この部分は、その前の部分とは対照的に事務的であるばかりでなく、強制的な感じさえ持たせるものがあったが、それだけに、わたしに興味を持たせた。
「いったい誰なんだろう。男かしら、女かしら」
わたしは、さまざまに思いめぐらしながら、招待の日、職場からまっすぐ成城の駅に降りた。
だが、憲吉の丘の家に入る前に、わたしはまた、一息入れなければならなかった。それは、いつも感じることだったが、そこには陶芸愛好を身分の象徴にするようなプライドのただよいがあ

り、そのことが、わたしに妙なとまどいを持たせるのだった。異質への適応が憶劫(おっくう)である、というよりも、それへの反撥といった方がほんとうだろう。

そんな経験がわたしに大きな呼吸をさせるのである。しかし、この拒絶反応というか、何となく重苦しいためらいのようなものは、今の自分にとっては、むしろ大切に持ち続けなければならないものである。努力してでも持ち続けなければならないものである、とわたしは思うのだった。それは、都市部の何かに対する農村部の、突きつけなければならない抵抗のようなものであるからだ、とわたしは思うのだった。

この日の、この場には、何のかかわりもなく、また誰も持たないであろう、堅苦しい自分を自分の肩に背負うような気持で、富本家の玄関にたどりつき、そのはなやかな応接間にわたしは静かに入っていった。

一枝は、敏感にそういうわたしの反応を知っていた。知りながら、それをちょっとも見せずに、誰をも平等にもてなすこの技巧を、わたしはわたしで知っていた。むしろ、この技巧は単なる技巧というようなものではなく、この人の資質ともいえるものではなかろうか。それにわたしはまた惹かれる。だから、職場を休んでいでも、ここに来る気持になれるのだと思いながら、陶芸愛好者の群のなかに強いて入っていくのである。

今日も、大ぜいの客が窯開けの時間を待っていた。広い南向きの応接間はその人たちで詰まっていた。入口に青磁の大きな花壺が置かれてあり、そのなかに白いくちなしの花が独特な強い匂いをただよわせていた。いつも花の多いこの部屋には、この他にどんな花が投げ入れられているだろう。見まわすと窓ぎわの棚には、いつも見る白磁の壺に、紫のあじさいが、贅沢に入ってい

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

た。

すると、そのすぐそばの皮の椅子に一人の女がかけている。ワンピースの紫は、あじさいの紫よりも濃く、まるで今日の主賓のように、大きな応接間のいちばん豪華な椅子にどっしりとかけていた。両側には二人の女性を伴っている。この三人一組の客は、応接間のはなやかさをさらに増す存在に映った。そのうちの一人は外国の若い娘だった。わたしは部屋の隅の小さな木椅子が一つ空いていたので、それにすがるように腰をおろして、この人たちを、かなりの間隔でじっと眺めていた。

紫のワンピースの主賓は、全体が小肥りだったが、ときどき、その応接間を鷹揚(おうよう)に歩いてみたり、連れの女たちと声高く話したり、また男性の誰彼れとも、キャッ、キャッと笑い声を投げ合っているその表情は、紫の服をもっとあでやかにひき立たせた。その肩から胸にかけてのやわらかな線は、そのからだのなかに、毎食溶けて入ったバターの量を連想させ、この人もまた、わたしに、ある違和感を持たせた。

むしろ、〝傲慢〟を感じさせるこの人は、そのわたしを無視しているのはもちろんのこと、自分のまわりに誰がいるのか、そんなことは、まったく関心がなさそうにふるまっている。客は自分だけのように、大ぜいの客のなかで平気にふるまえるその態度をじっと見ていると、この女性にとって、それはまったく当りまえであり、自然に見えてきて、むしろ見事とさえ思えてくる。

職場からかけつけてきた通勤姿のわたしとは、いい対照ではないか。そんな比較ができるようなゆとりが自分のなかに出てきたのも、窯開けまでの時間が、かなりあったためだろうか。客の応対に気くばり深く、一人ひとりに挨拶を交していた一枝は、部屋の隅にいたわたしをみつけて

寄ってきた。
「あっ、丸岡さん。きていらしたんですか。ごめんなさい。こちらへ出てきてくださらない。ほら、ご紹介したいといったのは、あの方なんです」
その目は紫の服の女にしっかり置かれた。そして、客と客の間を縫うようにして、わたしを連れて、その女性の傍に寄っていった。
「佐藤さん、このかたが例の丸岡さんです。わたしとは長いあいだの友人の……」
一枝はその女性にまずわたしを紹介し、そのあとで、
「こちらは佐藤俊子さん。あのう田村俊子さんの方があなたにはおわかりかもしれませんね」
といった。
一枝は二人の名前をつなぐと、すぐそこを離れた。人見知りするわたしは、新しい人にはすぐ馴染めなく、もじもじしながら立っていたが、頭はていねいに下げながら、〝例の〟と一枝が紹介のなかでいった言葉を、気持の上にとり出していた。これは、一枝とこの人との二人のあいだでは、前々から自分の噂が出ていたことを感じさせた。
すると彼女は、まるで花びらをふりまくようなあでやかな微笑で手をさしのべたが、その手のやわらかさは、わたしのゴツゴツした手に、クリームでも塗られるような気がした。
「あなたのお仕事、おもしろいお仕事なんですってね。いずれ、ゆっくり聞かせていただきたいわ。きょうは駄目だけど、近いうちにゆっくりお逢いしたいわ」
いままで、わたしの目に映っていた、人を人とも思わないふるまい方に対する反撥をふき飛ばすような急な風向きだったが、それでいて自然な、接近の仕方だと思わせるものがあった。

「もう、お窯の開く時間でしょう。一緒に見ましょうよ。ね」
彼女は、自分が案内をするような恰好で、わたしの先きに立った。その様子は自分の作品を見せでもするようなふるまいだった。彼女のあとに外人の娘と、もう一人の友人が続き、その三人のあとからわたしがついて行くのは、すでに当然のように、応接間から庭に、そして道をこえて窯場へと、ぞろぞろ歩いていった。
窯から出たての小壺、箱、湯呑み、皿は、水のしたたるようなつややかさを見せ、まわりに立って待っていた客は、一つ一つ憲吉の手によって示されるたびに賛嘆の声をあげた。わたしはこれらの客の列から一まわりうしろに立って、客と客のあいだから作品をのぞいていた。
そこでも田村俊子は、客のなかの客らしく、それを自然のふるまいにして、紫の服の裾をゆったりと揺らせていた。その時はもうわたしがどこにいるかも、彼女の関心からは外れているようだった。
そのときだった。憲吉が「これ、いかがです」といって、一つの湯呑みを俊子の前に持ってきた。〝俊子愛用〟と名前が入っている湯呑みである。
「まあ、嬉しい。ちょっと、ちょっと、これ見てちょうだいよ」
まるで自分の作品ででもあるかのように、右、左とふり向いて、俊子は自分のまわりの人たちに見せている。憲吉はまたその喜びの様子をじっとみつめている。
当時、わたしにも何人かの親しい友人がいた。だが、それらの友人たちのなかに無いものが、この人のなかにある。わたしは陶器の作品への興味よりも、この田村俊子という女性に、だんだん、惹かれはじめている自分をそこに見出していた。

「この人には、およそ日本の女にない開かれた潑剌さがある。そしてこの濃艶さは、妖しいほどの秘めごとを想わせる。いったいどういう女なのか」

と思うと、わたし自身が毎日のように接している女の層を一方で深く思うのだった。その女の層の色彩といえば、黒か灰色だけといえるほどの単色で身ごしらえをしている。無表情であり、無口である。それがいま、わたしの接している日本の女の大きな部分である農村部である。しかも、わたし自身、根っからその中の一人である。

もし、この単色を日本の女の平均面とすれば、田村俊子のこの濃艶さは、まるで不等質であって、その平均的な女のなかに入ることは不可能であろう。強いて入れよう、また入ろうとすれば、その平面から突き出てしまう。それも鮮烈な突出部となるであろう。それは強い点だけれど、孤立するしかない。瞬間ではあるが、わたしの想念は次つぎに昂進した。それというのも、日ごろ、田畑の平面ばかり見てきた自分の目路にとって、この突出部がある魅力を感じさせたからである。

いっそのこと、この魅力ある存在に思いきり迫ってみたい。そのことによって、日本の女の平面に波立たせることを試みてみたい。そのような興味に駆られたが、日ごろ、人とのつき合いが下手なばかりでなく、今の自分はつき合いの多くなることを避けている時期である。それは暮しを立てるためにも、自分の仕事にうち込むためにも、できるだけ浪費をつつしんでいる時期である。この人に興味を持っても、積極的に自分から求めてゆくことにはならないだろうし、それは避けなければならない。

独り言のようなこんな思いに耽っているあいだに、窯場の客はまた応接間に流れていったが、

彼女はそこをまだ動かなかった。わたし自身も、この場で、わたしと彼女の間に、どういうことが起きてくるのか、その期待もあって、そこに立っていた。その期待に自信もあった。
「丸岡さん、この湯呑み、すばらしいでしょう。わたしの名前入りよ」
〝俊子愛用〟をじっと両手に握って、もう一度、わたしによく見ることをすすめた。
「すばらしいですね」
わたしは落ちついて、ひとことといって、そのあとをゆっくりつけ加えた。
「実は、わたしも〝秀愛用〟という名前入りの湯呑みを富本さんからいただいているんです」
すると彼女は、ちょっとたじろいだ様子で、
「あら、そうだったの。それはいつごろのこと」
と聞いた。
「富本さんの安堵村時代の作品ですから、ずっと前のことです。わたしの学生時代のことです。これもすばらしいもので、いまでも大切に持っています」
「まあ、そう、じゃあ、ずいぶん古いものなのね。こんど見せてちょうだい。ねえ、あなたのお家へわたし行くわ。わたしはいつでも行けるわ。連れていってちょうだいよ」
名前入りの湯呑みを共有しているということで、わたしは彼女に一歩近づけたと思った。
「応接間へ行ったって、人ばっかりだから、少しこの辺、歩かないこと。竹藪が美しいわね。日本には、なんて緑の数が多いんでしょう。いろいろな色があるのね。こんなに緑のカラーの多い国は他にないと思うのよ」
彼女の言葉は、よどみなく続く。

「そうですか。長く外国にいらしたので、よけいそのことをお感じになるのでしょうか」
「そうなのよ。日本を離れていたあいだ、このやわらかな、いく種類もの緑をいつも思い浮べていたのよ。しかも日本の樹々は、その線が美しいのね。細い枝がとても美しいと思うの」
とゆっくり語り、遠く近く、その緑を追い眺めた。そして、
「さあ、歩きましょうよ」
肉づきのいいからだをハイヒールはかるがると運ぶ。そのあとについて歩くわたしの、歩き疲れた日本草履の鼻緒は少し色あせていた。
「わたし、きょうあなたに逢えたということは、とても嬉しいのよ。せんだって中条百合子さんに逢ったの。あの人は作家として、やはり逢えて嬉しい人だったわ。それと同じように嬉しいのよ。きょう、あなたと逢えたこと」
こんなことを面と向かって言われたことは初めてである。しかも直接であるだけに強いひびきがあり、それがなぜか通りいっぺんでないものを感じさせた。だが、初対面で、二十歳も年下であるわたしは、どうしても言葉少なく、彼女の問いかけに短く答えるだけだったが、この日の心には、あたたかな陽ざしが残った。
「田村俊子さん、とご紹介したほうがわかるかしら」と一枝はいったが、たしかにそうだった。その名は明治の終りから大正にかけて、女の作家として、目立つ存在だった。
その名前を、わたしも知っていたからである。そして『女作者』、『木乃伊(ミイラ)の口紅』、『炮烙(ほうらく)の刑』などの代表作を一応は読んでもいたからである。西欧自然主義の影響を強く受けた官能的な作家という批評をどこかで読んでもいた。また、長谷川時雨や、岡田八千代たちとも親交がある

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.